〔書　評〕

東洋文庫近代中国研究班　本庄 比佐子・内山 雅生・久保 亨 編『華北の発見（東洋文庫論叢 七六）』

（東洋文庫、二〇一三年　汲古書院、二〇一四年）

光田　剛

本書は東洋文庫近代中国研究班による共同研究の成果である。編者の一人本庄比佐子によれば、「東洋文庫近代中国研究班では、戦前・戦中期に日本の各種調査研究機関が中国で行った調査の報告書及び資料に関する研究を行ってきたが、なかでも重要な調査研究対象であった華北に重点を置いてきた」（v頁）。そのなかで華北の地域概念が曖昧であることを認識し、この研究書をまとめた、ということである。

本書は大きく第Ⅰ部「地域概念としての華北」と第Ⅱ部「華北農村と華北地域経済史」に分かれ、それぞれ七本、計一四本の論文を収録している。第Ⅰ部は「華北」という地域概念が、どういう基準で区切られ、どの範囲を指すかを、日本、中国、ドイツなどさまざまな視点から論じたものである。第Ⅱ部は戦前・戦中の日本の華北研究の中心的な分野であった華北農村調査を軸に、華北農村調査自体の研究や、そこで対象にされていた華北農村のその後の変容について論じたものである。また、第Ⅱ部最後の張利民の「中国の近代華北地域史研究の現状と展望」（吉田建一郎

訳）は、本書で採り上げられたテーマに関する研究の現状と、その現状が抱える課題について論じたものである。中国の研究状況について論じたものであるが、それはある程度は日本の華北研究についてもあてはまる論点である。

なお、この研究の途上、二〇一二年二月に東洋文庫で公開シンポジウムが開催された。これはこの研究の「中間報告会」としての性格を持つものであった。このシンポジウムに評者（光田）もコメンテーターとして参加している。したがって、評者がこの研究に対して完全なアウトサイダーではないことを、最初にお断りしておく。

また、本書はまず非売品として東洋文庫から発行され、その後、汲古書院から発売された。この評は東洋文庫版をもとにしている。

第一章は久保亨「華北地域概念の形成と日本」である。国立国会図書館所蔵の書物（地図を含む）から書名に「北清」・「北支那・北支」・「華北」を含むものを選び出し、一八七〇年代から一九〇〇年代と一九一〇年代から一九三〇年代に分けて、日本人がどのような関心でどのような地域を「北清・北支那・北支・華北」として論じたかを研究したものである。日本の大陸進出計画の拡大につれて日本人の華北への関心も広がって行ったこと、しかし、その関心が経済的関心と軍事的関心に偏り、文化的・政治的背景について意識されることが少なかったことを指摘する。また、華北（北清・北支那・北支）といっても、関心の中心は、日本からのこの地域への入り口にあたり、経済的・軍事的に大きな意味を持つ天津と青島におかれていたことを明らかにする。なお、一九〇〇年代までが日本にとっては明治期で、中国では清末、一九一〇年代から三〇年代が概ね日本にとっての大正期と戦前・戦中昭和期、中国では民国期である。

第二章は吉澤誠一郎「「西北」概念の変遷」である。華北とは、英語のNorth Chinaにあたるヨーロッパ語からの翻訳語であり、それ以前の明代・清代にはこの地域は「西北」と呼ばれていた。それは「西北」から「東南」の方向に伸びる大運河を多分に意識したことばで、食糧生産地である長江下流域が「東南」であるのに対して、その運び先である華北が「西北」と捉えられていた。また、それは、多くのばあい、その食糧の移送と重ねて論じられる地域概念であった。一九世紀になって、陝西・甘粛・新疆などでのムスリムの自立運動やロシアの勢力拡張に応じてこの地域が「西北」と呼ばれるようになり、二〇世紀にかけて華北とは異なる「西北」の概念が成立した。それが、人民共和国成立期に補強され、現在に至っていることを論じている。

第三章は浅田進史「ドイツ・中国関係史からみた華北」である。地理学者リヒトホーフェンは中国を大きく南北に区分した。リヒトホーフェンの学問はドイツの植民地政策・対外拡張政策に密接に絡むものであったが、一八八〇年代まではその区分論は一般的ではなかった。一八九〇年代末にドイツが膠州湾を獲得すると、華北・華南二分論や華北・渦中・華南の三分論が一般化し、さらにさまざまな関心に基づいた中国地域区分論が現れるようになった。しかし、その関心は、膠州湾とそこを拠点とする政治・経済関係に重点を置いたものだった。この点が、第一章での、日本の関心が軍事的・経済的関心に偏り、地域としては青島と天津に偏っていたという点と一致しているようで興味深い。

第四章は富澤芳亜「新聞記事から見る華北認識」である。神戸大学附属図書館新聞記事文庫に検索をかけることにより、日本の新聞記事に現れた「北清」「北支」「華北」が、どのような関心で、どのような記事に使われたかを分析したものである。日本は中華民国を公式に「支那国」と呼び、これとともに「北支」という名称を用いた。公式に

「中華民国」を使うようになった後も依然として「北支」が使われた。中国側がこの地域を「華北」と呼んでいることを認識し、「中国側の名称」として「華北」を使用することがあっても、日本からの呼称を意識するときにはやはり主として「北支」が使われつづけた。内容としては、一九一〇〜二〇年代には華北への航路の拡大・確保に関連した記事が多く、一九二〇年代になって飢饉や内戦による混乱のイメージが強く出てくることに注目している。

第五章は松重充浩「朝鮮在住日本人の華北認識」である。ここで分析の対象になるのは、戦前の日本統治下の朝鮮で発行されていた総合雑誌『朝鮮及満洲』である。第一次大戦期までは、そのときどきの政治的事件に応じて「地政学」的に捉えられていた「北清」・「北方」・「北支那」が、第一次大戦期の日本の青島占領とともにより客観的な「地誌学」的な捉えかたへと変化するという動きはあったものの、総じて華北への関心は低調である。満洲事変後、華北（北支）は朝鮮・満洲の隣接地域となり、朝鮮・満洲・華北（北支）一体という意識が進んだが、日中戦争が長期化して総力戦体制が強められるなか朝鮮が「兵站基地」の性格を強めると、その一体意識がかえって衰退することになる。日本の帝国主義的拡張に、朝鮮在住日本人の地域認識が密接に関連しつつ変容していく状況が活写されている。

第六章は田中比呂志「戦時期華北在住日本人の華北認識」である。研究の蓄積のある大都市の居留民ではなく、日中戦争下に華北の各地にさまざまな事情で住んだ日本人を中心に論じている。それらの日本人の多くは、占領下や親日政権下での「建設」に従事するために中国に渡った人たちであった。ここでは、満鉄の強い影響下にあった華北建設が次第に満鉄の影響から離脱していくこと、華北の範囲として華北・山東・山西が意識されていたこと、山西省については、資源地帯として、陝西省へと拡張していくための拠点として、共産党勢力と対峙する最前線としての特殊

な性格が認識されていたことなどが論じられる。抗日戦争期までの閻錫山の「山西モンロー主義」が山西在住の日本人にも受け継がれているという指摘は興味深かった。

第七章は瀧下彩子「旅先としての華北」で、一九一二年に設立されたジャパン・ツーリスト・ビューローを分析の中心に据え、日本人の満洲・華北（北支）への旅行について論じたものである。日露戦争の戦跡観光と温泉旅行を中心とした満洲旅行から、第一次大戦での青島占領を経て観光地として山東が注目され、旅行先として華北がクローズアップされることになる。満洲事変後は、満洲観光が盛んになる一方で、反日感情の強まりなどから満洲以外の中国への観光は落ち込み（なんとなく昨今の中国観光の落ち込みを連想させる展開である）、中国観光が復活するのは日中戦争の勃発（全面化）後であった。ここでも戦跡巡礼や兵士に対する慰問が強調されていたが、著者は、さまざまな資料の分析から、このような官側の強調はむしろ戦地に赴いているという意識の薄い観光旅行が行われていたことの反映だと論じる。これは、たとえば前線への慰問袋をデパートで買っていた、という、井上寿一の指摘する日中戦争下の日本の大衆社会化のようすとも重なり（『日中戦争下の日本』講談社、二〇〇七年）、興味深いとともに納得できる議論である。

第八章から第二部に入る。

第八章は内山雅生「戦時期日本の中国農村研究と華北」である。戦前・戦中期に中国農村を論じた天野元之助・福武直・平野義太郎の議論をもとに、自ら農村調査に従事した天野・福武が華北地域の特質についてははっきりした議論を展開できず、自ら調査を行わずに、法学者としての知的バックグラウンドから観念的に論じた平野義太郎がかえって明確な華北地域像を打ち出し、それを「大アジア主義」へと連続させていることに注目する。そして、著者自ら華

北農村調査に従事した経験もふまえて、この矛盾が現在の研究者にとっても依然として問題であり続けていることを論じる。なお、この論文は、竹内好によって一刀両断にされた平野のアジア主義の再評価の試みの一つとして読むこともできる。

第九章は佐藤仁史「民間信仰からみる江南農村と華北農村」である。江南農村と華北農村は、宗族組織の強い福建などと較べると、「宗祠」が存在せず宗族の共有財産も存在しないなどの共通点がある。しかし、両者の差異として、華北農村のほうが孤立性が強く、市鎮（市場、小都市）との関係が希薄なことも指摘されている。つづいて戦前・戦中に江南と華北の農村を調査した福武直もこの差異に気づいていたこと、しかし、それと他地域の違いにも気づいており、華北と江南の共通性から「中国民族の性格」を論じることの限界も認識していたと論じる。最後に著者は戦前・戦中の日本人研究者が、日本での氏神・鎮守のあり方をいわば参照枠組として中国の村廟を論じていたことの問題性を指摘している。これは、氏神・鎮守がもはや身近な存在ではなくなりつつある現在の日本人研究者にとってもなお自戒すべき問題点であろう。

第一〇章は弁納才一「農業生産からみた華北農村経済の特質」である。農業生産や農村社会経済の面では、米食が基本の華中以南と較べて「華北は麺食」という概括的な「くくり」がなされる。しかし、その実態をさらにつきつめてさまざまな面から「華北」とされる諸地域の「華北度」を測定して行くというユニークな試みである。その結果、高粱（コーリャン）・粟・玉蜀黍を基準にしたばあい、小麦を基準にしたばあい、米の生産の少なさを基準にしたばあいで結果が異なり、また、通常は華北に含まれない江蘇省の北部（「蘇北」）と中部（「蘇中」）がかなり高い「華北度」を示す。そして、とりわけ日本からの「華北」認識を念頭に「中華民国期中国農村経済から見ると、「華北」と

いう地域認識は幻想ないし仮想現実に近かったといわざるを得ない」と結論する。

第一一章は張思（河野正 訳）「村の文書からみた現代華北農村」で、中華人民共和国の、主として毛沢東期の文書を見出し、整理し、公刊するという作業を通じて得た、この時代の華北農村像を紹介している。たとえば、閉鎖性が強調されてきた人民公社期の華北農村についても、村民は外交・軍事情勢に関心を示し、一定の人口の流動があり、活発な対外交流が行われていたことが村の文書から見られる。この「村の文書」は未整理のまま保存され、ばあいによっては劣悪な状況で放置されていることがあり、そのクリーニング、整理から公刊にいたる著者の活動は非常に貴重なものである。

第一二章はリンダ・グローブ（古泉達矢 訳）「二一世紀の「華北農村慣行調査」村」である。戦時期に行われた「華北農村慣行調査」の対象になった華北の村を一九九〇年代に再訪、さらにその後二〇〇〇年代から二〇一〇年代までにもう一度訪れて、その変容を記し考察したものである。改革‐開放政策に適応して発展し、アパートへの集団移住に適応しながらも昔の村の組織を維持している村、経済の変化に適応しつつも土地の再分配に悩み続ける村、都市近郊で働き口の多い村、都市から遠くて出稼ぎが多く、行政の集合住宅への集団移住政策も影響して村のガバナンスが崩壊に瀕している村などが紹介される。それぞれの村に、政策の違いや都市からの距離の違い、これまでたどってきた経歴の違いなどによる差が見られるとともに、そのいずれの村でも、世代間の断絶や大家族の紐帯の弱体化が見られ、問題となっていることが活写されている。

第一三章は江沛（泉谷陽子 訳）「華北の交通システム近代化と都市の変動」である。ここでは清末から民国前期までの鉄道の整備が華北の都市にもたらした変動が実証的に論じられる。華北の鉄道網整備は、天津や鄭州など鉄道交

通の拠点（幹線の乗換駅）となった都市を発展させるとともに、青島や石家荘など、やはり鉄道交通の拠点となった場所に新たな都市を生み出した。これに対して、保定や開封など、鉄道交通の拠点とならなかった都市は衰退した。鉄道の整備とともに発展した都市は鉄道の路線によってその都市の構成を規定されたし、天津のような都市では鉄道開通前と開通後で街の中心地が移動するなどの変化がもたらされた。鉄道が、都市間をつなぐだけではなく、近代都市の形成にも大きな影響を与えたことが強調される。

第一四章は前述の張利民「中国の近代華北地域史研究の現状と展望」である。研究の蓄積のある長江中下流域・珠江デルタの研究と較べて、後発の華北地域研究には、「長期的考察が不十分で近代化過程における多様な要素の解釈が困難であること」、「空間意識が弱いこと」、「マクロとミクロ、研究対象選択が不均衡であること」、「檔案資料発掘の余地が多く残されていること」、「異なるレベルの比較研究が不足していること」という問題点を示し、「規範的な地域史研究の方法論」、「全体的な目配りと外向的な志向」、「研究領域の拡張と方法の更新」、「比較研究の重視」、「檔案資料の発掘・整理の重視」に留意して研究を発展させねばならないと論じる。

本書を一読して、評者は、華北がいまだ「発見」の途上であることを「発見」した。これは本書に関心を持つ読者の多くが共有する感想ではないかと思う。

華北という地域区分は自明のものであるように感じられる。万里の長城より南、淮河の北で、大きく見て黄河の流域、平坦地が多くて森林が少なく、食文化では麺食または粉食が主で、酒はアルコール度数が高い澄んだ蒸留酒の白酒を好む。成蹊大学法学部の北京大学国際関係学院との交流に参加して北京を訪れた人が持つ「中国」のイメージは、

多くのばあい、この「華北らしさ」イメージと共通するであろうと想像する。

しかし、弁納論文にあるように、その「華北らしさ」をさらにつきつめると、基準の取りかたによって、その「華北」に属するはずの地域に「華北らしくない地域」があるかと思えば、通常は「華北」からは除外される地域の「華北度」が高かったりもする。また、グローブ論文が示すように、改革‐開放経済の下で、個々の「華北農村」がたどる道はますます大きく分かれつつある。

加えて、それは、どういう関心から華北に接していくかという視点からも影響を受ける。明治期に「北清」が日本人の視野に入ってくる過程は、朝鮮から満洲へと日本の拡張政策が進展していく過程に重なっていた。それは、その先頭に立った軍人や経済人だけではなく、それに従って戦時下の中国に渡った人たちや華北農村調査に従事した研究者にも影響を与えていた。ただし、内山論文が指摘するように、華北農村調査に従事した研究者にも、時流に流されながらも抵抗の様子が見て取れること、さらには瀧下論文が指摘するように、その時流に乗って中国旅行に出かけた日本人が、そこが戦地であることを忘れて観光気分に浸っていたことなど、必ずしも日本人の華北認識が日本の拡張と完全に重なっていたとも言えない点が興味深い。

どういう関心から華北に接していくかが華北認識に影響を与えているという点ではドイツも同様であったことが浅田論文から看取される。両国は、自国の国家形成の過程と華北認識の進行過程が同時進行で進んでいたという点で共通する。それだけに、逆に両国のどのような違いをこの論文から読み取るかも重要な点であろう。

自国の関心のあり方から「華北」認識が影響されていたのは中国自身も同じであることが吉澤論文によって明らかにされている。食糧生産地と、遠くにありながらその大消費地という関係が問題視されたことから、明代から清代に

かけての「東南‐西北」認識が生まれて定着した。しかし、大運河が輸送の中心からはずれ、イスラームの覚醒と対外的危機が焦点になる一九世紀には、「西北」概念は、「東南」と切り離され、現在に近い「西北」概念へと移り変わっていく。

しかも、内山論文が指摘するように、現地を細かく訪問し調査するほどに、概括的に華北の特質を語れなくなるという矛盾も存在する。この天野や福武に見られる特徴は、農業生産・農村経済の視点から「華北」概念を幻想と喝破した弁納論文の採り上げる問題にも共通する。さらに、グローブ論文が描くように、その華北農村は、現在、大きな変化のただ中にある。ここでは論じられていないが、華北の都市の変容も同様であろう。かつては重要だった華北の特徴が歴史的なものになり、新たな特徴が現れ、しかも多様化が進展する。グローブ論文で指摘された華北農村の変容が、その村の個別的な事情によるものなのか、華北全体で進んでいる地域的な特徴なのか、それとも華北に限らない全国的な動きの一部なのかは、厳密に学問的に確定しようとしても、おそらくその前に現実が変容していってしまうだろう。

しかし、一方で、張利民論文が指摘するような問題点を克服する方向で精力的に研究が進められていることは、この共同研究が明らかにしているのではないだろうか。比較の視点も採り入れられ、檔案資料の発掘もさまざまな場所で進められて、その成果の一端は本書でも明らかにされている。たしかに張利民の指摘する問題点を全面的に克服するのは、もしそれが可能だとしても、まだかなり先のことになるだろうと思う。しかし、「華北」が「発見」の途上であることを研究者が自覚して研究を進めるならば、華北研究は問題点克服に向けた道筋からはずれることなく進んで行けるのではないだろうか。

最後に、本書の問題関心からはややずれる点があることを承知したうえで、一九三〇年代前半の華北政治を研究した立場から、何点かのコメントを附したい。

まず、華北は清代から民国前期にかけて首都の存在する地域であり、政治的な中心と認識されていたことを、華北研究のなかでどう位置づけるかである。さらに時期を拡げれば、今日の華北と重なる黄河中下流域こそが「中原」であり、中国の中心地域、少なくとも政治的に見た中心地域であると考えられていた。このことは、華北の概念について、また、中国人自身や日本人を含む外国人の中国認識にどのような影響を与えていたのだろうか。

たとえば、富澤論文では、一九二〇年代に華北が混乱の地として日本で盛んに報道されたことが紹介されている。この時期には、直隷派が安徽派・奉天派と内戦を繰り返し、続いて北伐軍との内戦があり、北伐後も国民党系軍事勢力のあいだで内戦が繰り返され、たしかに華北は混乱した。しかし、同時代の中国を見ると、華北と同様に混乱をつづけていた地域はいくつも指摘できる。それでも「華北の混乱」が注目されたのは、華北が政治的中心であり、本来は混乱してはならないはずの地域だと認識されていたからではないのだろうか。

この華北の「政治の中心」性は、一九二八年以後、まさにその「中心」性が失われたことから明らかにされていく面がある。

本書でも論及されているが、国民政府期、政治的な意味での「華北」は、河南省を含まず、南モンゴル地域の一部を含む河北・チャハル・山東・山西・綏遠の五省と、その地域内に存在する特別市（どの都市かは時期によって異なる）の領域を意味することが多かった。日本もこの地域を「北支」と認識し、一九三五年から展開される華北分離工作ではこの五省の中央政府からの分離が目指されたのである。

なぜこのようなまとまりができたかというと、当時の内戦の帰結によって生まれた政治的・軍事的情勢によるところが大きい。

一九三〇年、華北の国民党系軍事勢力が反蔣介石の立場で決起して大規模な内戦（中原大戦）が起こされた。この内戦の結果、民国前期（北京政府期）の末から華北に大きな影響を持っていた馮玉祥の勢力が壊滅し、北平（北京）・天津・河北省・チャハル省（南モンゴル東部）に張学良系の勢力が、山東省と青島市に馮玉祥から自立した韓復・の勢力が、山西省と綏遠省（南モンゴル中部）に閻錫山の勢力が分立することとなった（さらに西の陝西省は、これも馮玉祥から自立した楊虎城が勢力を確立するが、ここは通常は政治的には華北には含めない。この楊虎城が後に張学良とともに西安事変を起こす）。

これらの勢力は互いに対立し、しかしときに連携しながら、いずれも南京中央政府から一定の自立性を確保していた。一九三三年に張学良は罷免されて華北を去るが、河北省は張学良系、チャハル省はやはり馮玉祥系から自立した宋哲元の下に残り、やがて河北・チャハル（と北平・天津）が宋哲元勢力の下に組み入れられて一九三七年の盧溝橋事件を迎える（盧溝橋で日本軍と衝突したのが宋哲元の二九軍であった）。

一方で、河南省は、馮玉祥勢力の覆滅とともに、南京中央政府のコントロールに服する省政府が組織された。ここで「黄河流域」という点では典型的な「華北」のはずの河南省が「華北」から切り離された。非蔣介石系勢力の南京政府からの自立に期待をかけ続けた日本の関東軍・天津軍（支那駐屯軍）も、この「北支五省」を工作のターゲットとした。

したがって、盧溝橋事件後、張学良系勢力と旧馮玉祥系勢力（韓復榘、宋哲元など）が崩壊し、閻錫山も山西省を

日本軍に奪われるとこの華北・北支の一体性は自明のものではなくなる。しかし華北の独自性・独立性を即座に消滅させることはできなかった。この日本の占領下や親日政権の支配下での「華北」認識もさまざまな視点から考察すべき余地を残している。さらに、国共内戦後、中華人民共和国は当然のように首都を北京に戻す。この国共内戦期から中華人民共和国成立期の中国にとっての「華北」とは何だったかという問題も、また今後の研究の余地を残した点であろう。

また、この問題と並んで、華北と、すぐ北に接するモンゴル地域やマンチュリア地域との関連も、華北認識にとって重要な問題であろう。初めて統一中国の首都を北京に置いたのはモンゴルの元（大元、大モンゴル帝国）であった。それ以前はマンチュリア出身の遼（契丹）や金の首都の一つであった。本書でも「満洲に隣接する地域」として華北（「北支」）が認識されたことは論及されているが、マンチュリアとモンゴルに接している地域という性格は華北が「華北」として認識される以前から持ちつづけていたのである。華北がマンチュリア隣接地域であるとともにモンゴル隣接地域であることは、日本が華北分離工作と同時に内蒙工作を進めるとともに、天津軍と関東軍の微妙な対抗関係も絡んで問題として浮上する。しかし、その問題は、民国前期から満洲事変前の南京政府期にもずっと伏在し続けた問題でもあった。さらに、西には、吉澤論文にも言及されているとおり、イスラームを信じる多様な人びとが住む地域が存在した。蔣介石は剿共戦（共産党包囲撃滅戦）の過程で、またその前から、これらのムスリムを南京中央政府の下に統合することに腐心している。

華中・華南などの漢人・漢民族多住地域との対比を進めるだけでなく、マンチュリア、モンゴルや東トルキスタンを含む西方のムスリム多住地域に隣接する地域としての華北という観点を導入することも、華北の政治・社会をめぐ

る研究や、華北認識をめぐる研究には、いずれ必要になってくる視点ではないかと評者は考えている。